

私の読書日記

幸・不幸の過去・未来

酒井順子

エッセイスト

×月×日

好きな著者の新刊に、書店の棚で邂逅した時の喜びは大きい。それが久しぶりであれば、余計に。

『草むらにハイヒール』

(小倉千加子 いそっぷ社 一七〇〇円+税)には、待ち

合わせの時間よりも早く着きすぎて入った街の書店で出会った。七年ぶりの新刊を、いそいそと買って帰る。

週刊誌の連載エッセイの

「よりぬき」版である本書。導入部は人物評が続くが、佐野洋子、ちあきなおみ、ホームレス歌人(朝日歌壇)投稿者、伊良部秀輝、そして上野千鶴子……というその人選が、琴線に触れる。と言うよりは琴線をかき鳴らし、胸の中で整理されないままに激んでい

たものが攪拌され、分離していく様が心地よい。

明石家さんま、桂ざこば

など、お笑い人物評からは、可笑しさの後に哀しみが漂う。明石家さんまとの関係性から見た「村上ジョージの魔力」からは、斬られた側が斬られたことにも気づかぬほどの刃の冴えが……。

谷亮子のような人を描か

せたら著者の右に出る人はいない。二〇〇八年には、北京五輪で「ママでも金」

と宣言したが、その夢が叶

わなかった谷は、なぜ子どもを保育所に預けなかったのか。家庭を持ちつつ働く女性への支援を利用せずに「きちんと主婦をしている」

自分が金メダルを取ってこ

そ意味がある、と思ってい

メダル獲得」に燃える前に、『ママでも金』と宣言した理由もしくは結果によって燃え尽きたのである。保育所、幼稚園への言及も多いのは、著者がこども園の運営に携わっているから。「就労する母親と専業主婦も対立しているが、親の利害と子どもの利害もしばしば対立している」といった言葉にハッとすると人は多いだろう。

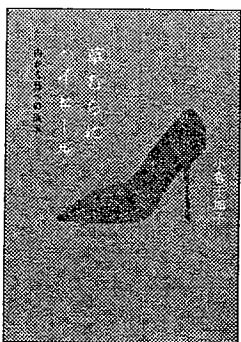
話題は多岐にわたるが、

全ての話題において、底にあるものが自分とも繋がっていることに気づかされる。全八十八本のエッセイ。ちなみに表題は、栗木京子の短歌の言葉である。

×月×日

小倉千加子は二〇〇三年

刊行の『結婚の条件』において、結婚とは男のカネと女のカオの交換である、と書いた。しかし『草むらにハイヒール』に収録される二〇一三年のエッセイでは、結婚がカネとカオの交換であった時代はまだ救いがあったのであり、その後、結婚は「カオとカオの交換」となってきたと書く。カオとは単なる美醜のことではなく、身体性とそれを裏付ける能力と努力のことであり、日本は「新しい階層社会」に入ったのだ、と。



『草むらにハイヒール』